

行事の機能

行事にはどのような機能があるのでしょうか。

2つあるように思います。

一つは、

指導機会機能

です。

つまり、行事での出し物の指導(練習)や当日の活動を通して、子どもたちの力を直接に引き出す機会となるということです。

「声が大きく出せるように指導した」とか「ハーモニーを感じて歌えるように指導した」とかということがこれに当たります。

しかし、もう一つあるように思います。

それは、

診断機会機能

つまり、教師が練習のさなかに「ここは不十分だな」とか「こういうことはできるんだな」とか診断する機会になるということです。

行事の指導のさなかには、前述の「指導機会機能」としての面が多くあるわけですが、事後指導においては「診断機会機能」としての面が重要になってきます。

学芸会でできていたこと、できなかったことはなんであるのかを、明確に書き出し、それをいかに具現するかを考えていきたいですね。

英語科ができます(とします)

先週、夜9時のNHKニュースで「早ければ19年度小学校英語授業開始」と報じられました。

私は見ていませんが、次の朝の民放ニュースでも同様に報じられたようです。

前にも書きましたが、教科書会社はすでに英語教科書をつくっていますし、もうその段階を終えてCD掛け図などの副教材の制作も終わっています。

19年度待たなし、だと私は思います。

では、「英語科教師」がすぐに配置されるかということ、現在の状況からは考えづらいです。

前例として参考になるのは、情報(コンピュータ)教育が学校に入ったときでしょう。

あのとき、文部科学省は数億円をかけて、研修を行いました。それに参加できたのは現場の一部の教師でしかありませんでした。

つまり、今回も職場の環境は「現状維持のまま」で、英語を教えることになるはず。です。

おそらく、年間各学年30時間程度でしょう。

つまり、週一です。

それをだれが教えるのでしょうか。

考えられるのは3つ。

- ・英語が得意なTT教師が担当する。
- ・AETを活用する。
- ・担任教師が教える。

これらを選択したり、組み合わせたりしてことにあたるのでしょうか。

各学年10時間分の指導計画をすでにつくっている天塩小学校は、試行期間で、30時間を実施するこ

とが望ましいと私は思います。

来年度の課題といえるでしょう。

これは、教務部とタイアップして研究部も取り組んでいかなければいけないと思います。

本校研究会の意図

表立って書いてはいませんでしたが、本校の研究会にはいくつかの「ちょっと変わった点」があります。その意図を少し書いておきたいです。

研究協議をパネルディスカッション方式にした

研究というのは、本来対等な立場において、成立するものです。

初任者だろうが、この道30年のベテランであろうが、大学の教授だろうが、研究においてその意見は対等なのです。例えば初任者の言った意見が大学教授より正しいということはあることなのです。(通常は、そんなことは滅多になくても……)このパネルディスカッションが、そうした対等性をある程度保障すると私は考えています。

また、「授業者－フロアー助言者」という研究協議を、私は少々窮屈だと感じています。

中々フロアから意見は出ないし、授業に対するつっこんだ意見も出ないまま、みんな押し黙って、仕方なく司会が指名して散発的な意見が出て、助言になる。どうもいただけないと私は思っています。

それを打破したいとも思っています。

研修内容をポスターセッションする

表現力を付ける研究をしている学校の先生が、表現力がない。っていうのはたいへん良くできた笑い話だとは思いませんか。

私は、表現力を付けることができる教師は、表現力のある教師だと思います。

指導案検討

指導案検討を先週集中的にやりました。

2つの指導案ともに、たいへん忙しい時期につくっていただきましたが、素晴らしいものと思いました。特に、次の点がよいと思いました。

・ 児童の実態 国語科における傾向

・ 調査結果

・ 教師の願い

・ 仮説

……

このような指導案の流れに、一貫性がある。

つまり、児童の実態から、児童の課題を見だし、それを教師の願いとして書き、指導計画・本時案で具現するという流れができていたのです。これは、当たり前のように見えますが、そうでない指導案の方が、世間には多いのです。